高城中学校だより

令和６年２月２２日（木）　校長　飯干　裕二

ボランティアスピリッツ賞を受賞しました

２月４日（日）に都城市まち中広場にて、「みやこんじょボランティアフェスティバル」が行われました。その中で、都城市内の小中高等学校６６校より、５校がボランティアスピリッツ賞に選出（本校も見事に選出されました）され、その受賞式が行われました。大変名誉な賞で、選出の理由として、今年度、生徒会が「地域貢献」を掲げ、主体的に様々な取組を行ったこと、２年生が作成した「高城町観光マップ」、「団扇」等が評価されたことです。次年度はこの取組を礎にし更に地域との絆を深めて欲しいと思います。高城地区社会福祉協議会並びに高城地区まちづくり協議会の皆様のご支援に感謝申し上げます。

参観日及び立志式へのご出席ありがとうございました

２月９日（金）に参観日（２学年は立志式）が行われました。１学年は参観授業と学年懇談。２学年は立志式と学級懇談。３学年は学級懇談のみと各学年で異なる内容でしたが、保護者の皆様におかれましては、ご多忙の中、ご出席いただきありがとうございました。特に立志式につきましては、５名のご来賓をお迎えし、高城生涯学習センターで行われました。式の中では、生徒一人一人が座右の銘とこれからの生き方について決意を述べてもらいました。４月からは最上級生として、下級生の模範となることを期待しています。

卒業式に際し

もうすぐ３月です。３月といえば別れの時期であり、卒業式（３月１６日）が実施されます。その前に県立高校一般入試があり、そして、卒業式前の３月１１日は未曽有（みぞう）の大震災と言われる東日本大震災が発生した日です。

今から紹介する文章は、発生後に宮城県気仙沼市階上（はしかみ）中学校卒業式での卒業生答辞（梶原裕太さん）です。多くのメディア等（現在でもYouTube等で動画が見れます）で取り上げられ、何度見ても胸に突き刺さり、自然と涙が溢れてきます。

卒業生代表答辞

本日は未曽有（みぞう）の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙行していただき、ありがとうございます。

ちょうど１０日前の３月１２日。春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通い慣れたこの学び舎を、５７名揃って巣立つはずでした。前日の１１日。一足早く渡された思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳（は）せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こることも知らずに・・・。

階上（はしかみ）中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。

時計の針は14時46分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心をもち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには大き過ぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合っていくことが、これからの私たちの使命です。

私たちは今、それぞれの新しい人生の一歩を踏み出します。どこにいても、何をしていようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

後輩の皆さん。階上中学校で過ごす「当たり前」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。先生方、親身のご指導、ありがとうございました。先生方が、いかに私たちを思ってくださっていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

お父さん、お母さん、家族の皆さん、これからも私たちが歩んでいく姿を見守ってください。必ず、よき社会人になります。

私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。

最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。

平成２３年３月２２日　第６４回卒業生代表

いかかでしょうか。この卒業生答辞（メッセージ）は、これから何十年と時を経ても変わらないものです。そして、今年の元日に発生した能登半島地震。被災地の学校は、どのような卒業式を迎えるのでしょうか・・・。

だからこそ、私たちは「当たり前」ということに感謝し、是非、３月１６日（土）に挙行される第７７回卒業式は、心のこもった、感動の卒業式にしたいものですね。